

今、一番興味のあること

放課後に伸びる才能

私は子どもが大好きなので、子どもたちに大人社会がその最善を与えているかがとても気になる。

たとえば、日本の子どもたちの放課後時間。それは才能が伸びる可能性の宝庫のほずである。大人の守りのないまま放置されることなく、授業の枠を超えた上限のない新しい学びに出会う密度の高い時間のはずである。

国際政治学者であったころ、海外出張の際、よく地元の小学校を訪ねた。多くの国で、放課後は親が迎えに来るまで構内にとどまり、宿題やお稽古をやる仕組みが整っていた。放課後レッスンのメニューが家庭に送られ、家庭が希望する項目に登録する。教えるのは地域内の専門家。スポーツ好きの子には選手だった人などが、歌の好きな子には音大の学生が、絵のクラスには町の芸術家が、という感じである。

猪口邦子

(衆議院議員)



二〇〇五年に初代の専任の少子化担当大臣になったとき、日本では大半の母親が第一子の出産前後に職場に退職届けを出すので、育児休業の申請をしやすい社会への取組みを進めたが、母親が退職届を出すもう一つの山があることを知った。子ども的小学校入学時である。下校時刻が早く、一人での留守番は不安であり、また塾などの送り迎えという理由が多い。もし小学校内に放課後の補習や才能教育の場があり、親が先生のところに送り迎えするのではなく、先生が放課後の小学校に来て、教えてくれたら、どれほど効率もよく、安心であろう。

放課後教師についても自信があった。いわゆる二〇〇七年問題である。戦後生まれの団塊の世代が非常に大量退職する年のことで、負の響きがあるが、その世代こそは、戦後日本の復活を実現した世代である。この世代が

地域にもどってくるのだから、是非、週に一度でも何らかを地元の小学校の放課後ルームで教えてくれたら、と願った。また最近では留学生が各地に来ている。母親が英語塾に送り迎えするより、留学生に地域の小学校で生の外国語のお稽古をお願いしてはどうだろう。所得の高い家庭の子どものみ放課後の塾という機会の不均等問題も解決する。日本のどこに生まれても、どの所得階層であっても、小学生には等しく地域の大人社会が提供できる最良のものを与えたい。

これを実現するには、児童福祉の観点が含まれるから厚生労働省と、小学校の放課後プログラムであるから文部科学省と、子育て世帯に安心感をもたらす少子化対策面の意見が揃う必要があった。そのことを悩んでいると、官邸の長勢甚遠内閣副長官が、「悩んでいるより、三大臣で話し合ってみれば」と背中を押してくださいました。長勢副長官は、今も感動をもって思い出すほど親身に、非力の私の大臣職を官邸サイドから支えてくれた。

二週間後のある日。その三者会談の場に、私は緊張のあまり一時間も早く構えていた。やはり、時間より早めにまず川崎大臣が、続いて小坂大臣がいらした。

「あなたのために、よいニュースをもってきた」と川

崎大臣。会談が始まって5分で、「両大臣と「放課後子どもプラン」の実施について合意に至った。「根回しはほぼ済んだから」と私を励ましてくださる川崎大臣。

自民党という政党の力量の本質を目の当たりにした。ありがたかった。自民党には、夢を現実に転換していくベテランの力量がある。新米の私の必死の声を引き取って調整してくれる見えざる手がある。

日本の全ての小学校ないし小学校区にて、どの家庭の子どもが参加できる保育と才能教育を合わせた「放課後子どもプラン」が進むはずだが、各地の教育委員会の実施能力の違いで、進捗具合は心配である。

先日、党本部での保育関係者との研修会で、「放課後子どもプラン」は夕方五時に子どもを出すので、保育園で残り時間を預かるとの指摘があった。夕方七時までの実施にすれば、どれほどの若い親は安心であろう。「放課後子どもプラン」のない地域では、保育園を卒園した子どもが、小学校の放課後、元の保育園のロビーにそつと身を寄せている。そんな現場をつい最近も視察した。この国は、大人のなすべき最良を子どもたちに与えているのだろうか。今年は改めて、日本の子供たちの放課後の幸福に心を寄せていきたい。